

[2020年度 最優秀賞]

## “普通のものさし”を乗り越える — 貧困家庭の子どもたちの主体的実践 —

廣田 みのり

### はじめに

私は世帯年収140万円の母子家庭で育ち、“貧しさ”と共に生きてきた。家計は自転車操業で、その月に稼いだ母のパート代が、翌月の給料日を待たずして無くなるのが常だった。父から養育費が振り込まれるのは数ヶ月に1度程度の気まぐれで、金額も5,000円～1万円程度のものである。もちろん、ウチには借金もある。大学受験費用や入学金などもすべてカネを借りて工面した。こんな身の上話をすると、多くの人は「ああ、苦勞してきたんだね」「つらい思いしてきて大変やったね」と「優しさ」に充ち満ちた憐憫のまなざしを向けてくる。彼らが向けてくるまなざしの根底にあるのは、「貧困家庭や両親が揃っていない家庭の子どもはみんな「普通」の暮らしができず、つらくて苦しくてかわいそうな哀れむべき存在だ」という一様な「貧困イメージ」だ。しかし、私からすれば収入が低いのも、父親がいないのも、借金をしなければ大学に入れないのもすべて、あたりまえで普通のことである。そのため、彼らが向けてくる「優しさ」はとんだ的外れで、違和感を覚えざるを得ないものであった。

貧困問題を調査テーマに据え、「貧困」「アンダークラス」「ホームレス」「生活保護」などがタイトルに含まれる書籍や論文を目にしたら読むようにしてきた。しかし、それらを読み進めていったものの、どれも同じようなことばかりが書かれたり主張されたりしており新発見も面白みもなかった。“同じようなこと”というのは、貧困層の「かわいそう」で「支援されるべき」存在であるという側面ばかりに着目した温情主義的な語りのことである。当事者への聞き取りをとっても、当人のつらく苦しい経験やあからさまな蔑視・中傷を受けたエピソードなどネガティブな語りのみが切り取られており、いかに貧困層が「かわいそう」で「支援されるべき」存在—「無力な弱者」であるかという主張を補強するために利用されているようだった。この様なドキュメンタリー、ルポルタージュ、研究の枠組みにおいて、貧困層の主体性や生き活きとした暮らしぶりは、その枠組みを根底から揺るがす「不都合な真実」となる。貧困層への理解を深め、エンパワーメントをはかると吹聴する彼ら自身が、貧困層を「弱者」たらしめているのではないだろうか。

今回、聞き取り調査を行うなかで語られた“家庭”は、おなじ貧困家庭といえども“まったくおなじ”では決してない。今の家族構成になった理由や家族との関係性、暮らしぶり、貧困状態に陥った理由に至るまで、極めて多様である。その多様さを無視し、一様な「貧困」イメージ(ステレオタイプ)で押し固め「弱者」の烙印を押すということが、いかに暴力的なことであるのか。「かわいそう」なだけではなく、当事者の“普通の暮らし”を描き出すことこそが重要なのではないかと考えた。

## 第1章 研究の背景と調査の目的

### 1-1 「子どもの貧困」を取り巻く背景

近年、マスメディアやインターネット上で「日本の子どもは約7人に1人が貧困状態」といった話題がセンセーショナルに語られている。「子ども食堂」や学習支援など有志やNPOによる貧困家庭への支援活動が大きく取り上げられるのも、頻繁に目にするようになった。また、2013年には「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（子どもの貧困対策法）が制定された。これは、子どもの貧困が政府を挙げて解消に尽力すべき問題であると捉えられるようになったことを意味する。

「子どもの貧困」が社会的な関心を集めるようになったのは、バブル経済崩壊後の「失われた20年」に突入してからである。1990年代に不況期を通して路上生活者が大量に都市空間にあふれ出したことや、2000年代にインターネットカフェで寝泊まりをする若者や「年越し派遣村」という空間装置がマスメディアで報道されたことが貧困の社会問題化を促す契機となった（西澤 2010）。「子どもの貧困」においては2000年代後半になり、ようやく阿部（2008）らを中心に研究の対象とされるようになった。

貧困問題が多くの人々の知るところとなり、支援の輪が広がる一方で、生活保護受給者へのバッシングやひとり親世帯への偏見、路上生活者への差別的なまなざしといった貧困への差別的な理解が表れるようになった。加えて、社会の構造が新自由主義的に再編され、人びとが激烈な競争にさらされるなかで、経済的な貧しさを能力不足や選択の失敗の結果として理解する「自己責任」が強調され、貧困を個人問題へと帰する動きもみられるようになった（松本 2019）。

だが、「自己責任論」の名のもとに社会的スティグマを科されるようになったのは、貧困層や“マイノリティ”と称されるような人たちだけではない。ジュディス・バトラーは、新自由主義の権力諸形式が社会の全構成員を潜在的または現実的にプレカリアス（不安定）なものとして確立していると述べている。また、人びとを「プレカライゼーション」（不安定化）に服従させる過程は、「自己責任」イデオロギーの中に構造化されている。プレカライゼーションが進行すると「人は、自立することへの「責任」の要求に従えば従うほど、ますます社会的に孤立し、ますますプレカリアスだと感じる」ようになるという（バトラー 2018：22-23）。つまり「自己責任論」は新自由主義的構造をとる社会において、すべての社会成員が晒されるものであり、「自己責任論」に晒される私たちは常に不安定で不確実な空間に存在している。加えて、先行きへの不安や恐怖に苛まれ、日々怯えながら暮らしを営んでいるのだ。

だが、すべての人間が「自己責任論」に侵されているにも関わらず、実際には貧困層や“マイノリティ”にのみ「自己責任」の矛先が向けられるのは、「自己責任」は、自らを律するための言葉としてではなく、他人の破滅や失敗を揶揄したり、責任を末端に押しつけるための決め台詞として利用されてきたからである（西澤 2010）。このように、新自由主義的な構造から生み出される「自己責任論」は、貧困層への糾弾や貧困家庭の子どもたちへの偏見、差別的なまなざしとなって立ち現れることとなったのだ。

## 1-2 “普通のものさし”で測る「貧困」

かつては「子どもの貧困」というと、“アフリカの衣食住が十分に得られない子ども”をイメージする人が大半だったように感じられる。このイメージは貧困の定義のうち、「絶対的貧困」に該当するものである。絶対的貧困とは、人が生存するために根本的に必要な条件—十分な食糧や雨風をしのぐ場所、清潔な衣服など—を十分に得られない状況を指す。絶対的貧困という概念は、住んでいる場所や年齢によって左右されない、世界共通の普遍的な基準であるといえる(ギデンズ 2009: 341-343)。

絶対的貧困と共に、「貧困」を定義する主要な概念として「相対的貧困」が挙げられる。相対的貧困の概念は、個々の社会で優勢な生活水準と結び付けて考えるもので、国や地域によってその定義は異なる。2019年の国民生活基礎調査によると、日本における2018年の子どもの貧困率は13.5%であるという。これは「相対的貧困率」に基づいて算出されたものだ。「相対的貧困率」は、等価可処分所得の中央値の半分を貧困線とし、このボーダーラインを下回る等価可処分所得しか得ていない者の割合を指す。2018年の貧困線は127万円となっており、これを下回る等価可処分所得しか得ていないものは相対的貧困状態にあるとされる。この算出方法はOECD（経済協力開発機構）の作成基準に基づいており、2010年に行われたOECDによる相対的貧困率の国際比較によると、日本における子どもの相対的貧困率はOECD加盟国34か国中10番目に高いという(厚生労働省 2019)。

2000年代以降、「子どもの貧困」に関する研究が多数なされてきたが、ここで用いられる貧困の定義はおおよそ相対的貧困の概念に基づくものである。しかし、貧困線によってその人が貧困状態にあるかどうかを線引きし、相対的貧困に当てはまる人のみを「貧困」とするの是最適といえるだろうか。国民生活基礎調査内で報告された2018年の貧困線である127万円を例にとれば、等価可処分所得が126万円の人は「貧困」であり、128万円の人は「貧困」ではないということになる。わずかな等価可処分所得の差で、暮らしぶりに大きな差がつくだろうか。等価可処分所得が126万円の人が貧困状態にあるならば、128万円の人も「貧困」である可能性が高いということは容易に想像がつく。行政手続きにおいて、煩雑さを避けたり社会保障制度のターゲットを定めたり、また貧困状態にあると予想される人数を大まかに把握したりするためには、貧困線を定めることは必要不可欠であろう。しかし、貧困線を定めるということは同時に、どのような人が「貧困」であるのか、どのような暮らしや経済状況を「貧困」と呼ぶのかという“貧困イメージ”を形成する。この一面的な“貧困イメージ”はイメージとは合致しない貧困家庭への糾弾や自己責任論の強調につながりかねない。また学問研究において、貧困線を用いて調査対象者の選別を行うことは、“貧困線には満たないが当人の体感としては貧困状態にある”という人たちの声をないがしろにし、その実態を“無きもの”、“見えないもの”とする恐れがあるのではないだろうか。

また従来の「子どもの貧困」に関する研究、特に社会福祉分野において貧困の当事者は、経済的・精神的に数々の困難を強いられており、自治体や有志の活動家から支援を受けるべき「かわいそう」で「無力な」社会的弱者として描かれてきた。阿部彩は、貧困家庭について「すべての親は一生懸命に「温かい家庭」を築こうとするのであろうが、親の年収によって、子育ての環境は大きく異なっているのである。相談相手もいない、いざという時に支援してくれる人もいない、休日もゆっくりと子供と過ごせない、という状況であれば「温かな家庭」で「のびのび」と子供が育つことが困難になってくる。」と述べている(阿部 2008:

7)。この記述には、社会一般で望ましいとされる子育ての形式や環境、家族のかたちをとらなければ、困難を抱えているとみなす“普通のものさし”が潜んでいる。彼らは当事者を「保護する」ことを目的とするあまり、貧困家庭に生まれ育つことはいかに「不利」であるかを熱心に説き、その「不利」な土台にばかり注目してきた。そして「不利」な土台の上で貧しさに常に翻弄され太刀打ちできずにいる脆弱な人間性を記述するのだ。その一方で貧しさに振り回されつつも自発的に行動し、時には自分の貧しさをうまく利用しさえする当事者の主体的な意識や暮らしぶりからは目を背けている。

### 1-3 誰が決めた「貧困」か

池谷和子らは相対的貧困による子どもの貧困の定義について、「大人の貧困の定義」の概念をそのまま流用している点に問題があると指摘している（池谷ほか 2020）。これまで蓄積されてきた貧困研究において、貧困家庭の子どもたちがどのようにして自らの家庭を「貧しい」、「自分の家は他とは違う」と捉えるようになるのか、つまりどのように“貧困意識”を抱くかという点は深く言及されてこなかった。大人であれば、所得や税率といった明確な数字によって、または生活保護などの公的な経済的支援を受けているかによって自分が当該社会のなかでどの程度の位置にあるかを認識することが可能である。しかし、子どもの場合は親の所得をはっきりと知らない場合が多く、親の所得を知っていてもそれが一般的にみて多いのか、少ないのかを判断することは難しい。そのため貧困家庭の子どもたちが、貧困家庭に生まれ育った、または家庭が貧困状態に陥ったその時点で無条件に「自分の家は貧困家庭だ」「自分は貧しい」と認識するとは考え難い。

「子どもの貧困」研究において聞き取り調査がなされる場合でも、貧困家庭の子どもが“貧困意識”を抱いているか否かは明らかにされていない（林 2016）。研究者の側は調査協力者となる子どもが貧困家庭であることを、相対的貧困の概念や生活保護受給世帯であるかなどの外的な判断材料で測ることが可能である。そのため「この子は貧困家庭の子どもだ」という前提に立った会話やインタビューがなされており、あえて「自分の家は貧困家庭だと思うか」や「なぜ自分の家庭が貧乏だと思うのか」といった根本的な質問や会話はなされていないのだ。

貧困家庭の子どもたちの生活世界を当事者の声を基に描き出したものに、知念渉の『〈ヤンチャな子らの〉エスノグラフィー』がある。ここでは「ヤンチャな子」、「ヤンキー」と呼ばれるような子どもたちを調査対象としており、そのなかでも特に「厳しい環境」で育ってきた数名の語りを抽出し、“貧困家庭であること”について分析している。知念は、「ヤンチャな子ら」が理想的な家族を語るなかで、自らの家族を理想と反対の「逸脱的な家族」と定義して語ったことに着目している。そのことについて、知念は「彼らの厳しい生活状況を踏まえれば、このような語りは当然のようにも思える」と述べている（知念 2018:154）。続けて、「ヤンチャな子ら」は常に自らの家族を「逸脱的な家族」として記述するわけではなく、知念が彼らの家族を「逸脱的な家族」として記述した際に、それを拒否したというエピソードを取り上げている（知念 2018）。この研究は貧困家庭の子どもたち目線で生活世界を記述し、一様なばかりではない流動的な貧困像を提示したという点では従来の研究とは異なる。しかし、貧困家庭の子どもを「逸脱した」存在であることを前提とした“普通のものさし”に即して記述が展開されている点では、従来の研究と大きな差はなく、当事者が自身の家族を「逸脱的

な家族」と発言するに至るまでの過程が不透明である。知念は当事者の“生の声”を重視し彼らの暮らしぶりに着目しているが、「普通の家族」と対置するものとしての「逸脱的な家族」、「貧困家族」という二項対立から逃れられていない。二項対立の視点を前提として当事者の声を拾い上げたところで、「貧困家庭」の子どもたちに関する新たな発見はない。

以上の問題意識に基づき、本論文では「普通の家庭」と対置する逸脱したものとしての「貧困家庭」ではなく、「貧困家庭」の子どもから見たごくあたりまえで日常的なものとしての“貧しさ”や貧しさと共に生きる子どもたちの主体的な実践を提示する。それを通して“普通のものさし”に即した「貧困家庭」に関する記述が何を見落としてきたのか、そして“普通のものさし”とは何かについて考察する。

#### 1-4 調査対象と調査方法

本論文では経済的に貧しい状態にある（もしくは、経済的に貧しい状態を過去に経験したことがある）20代の人を調査対象とする（表1）。ここでの「経済的に貧しい状態にある」とは、本人が「私は貧困家庭出身だ」、「自分は経済的に貧しい生活を送っていた」などというように、貧しさを自己認識している状態のことを指すもので、必ずしも貧困線を下回ったり、既存の貧困の定義に該当したりする必要はない。調査対象を20代に設定した理由としては、子ども時代の経験を鮮明に想起することが可能であるが、一步下がった視点から客観的に自己を捉えられるようになっていると考えられるという点がある。また、アルバイトや就職によって部分的な経済的自立が可能であり、家庭の経済状況に大きく左右される状況から何らかの変化が起こっていることが予想できるため、過去と現在の二つの視点から貧しさを捉えることができるのではないかとこの点も理由に挙げられる。

本論文で使用するデータは、上記の調査対象者への聞き取り調査にもとづいている。聞き取り調査は、経済的に貧しい状態を経験したことのある人に対し、2019年9月～2020年12月まで、ひとりあたり約2～4時間程度の半構造化インタビューを行った。調査協力者の属性や家庭背景については表1に示した。また、インタビューとして設定した時間以外での筆者と調査協力者の日常的な会話などのやり取りに関してもインタビューの内容と共に適宜フィールドノートに記録した。

調査協力者の募集は、SNSなどに「貧困家庭に生まれ育った人・他者とは違う家庭環境だと思う人でインタビューに協力してくれる方はお声掛けください」といった文言で呼びかけ、自発的に協力しても良いと反応を示してくれた人に対してインタビュー調査の協力を依頼した。他に、筆者との日常的な会話において、自身のことを「他者とはちがう家庭環境出身だ」「うちはお金に困っている」と捉えていることが伺える人に対して、筆者の側からインタビュー調査の協力を依頼した場合もある。調査協力者と筆者の関係性はごく親しい友人や同級生、友人の紹介を受けた知人などである。いずれの調査協力者に対しても筆者自身の家庭環境や経済的状況は事前に明示し、その上でインタビューや会話のやり取りを行った。

表1 調査対象者リスト

名前	年齢	家族構成	家庭背景
Aさん	22歳	母, 異父弟, 異父妹	幼稚園の頃に母と離別。小3～小5を児童養護施設で過ごす。小5の時に実母が施設から引き取り共に暮らすようになる。
Bさん	22歳	母, 父, 妹⇒母, 妹	中2の頃に父と死別。
Cさん	25歳	父, 母, 祖母, 妹⇒母, 妹	20歳の頃に父と死別。死別を期に祖母とは離れて暮らす。
Dさん	22歳	父, 母, 祖母, 姉, 双子の姉	父の持病やリストラが原因で収入不安定。
Eさん	24歳	母, 祖母, 異父弟2人, 異父妹	非嫡出子として生まれる。母のネグレクトにより中学生まで祖母宅で生活。一度、母, 義父と暮らすも離別。その後の中学時代は生活保護を受給しながら母と暮らす。
Fさん	22歳	祖父, 祖母	小学校低学年で父と離別、小5で母と死別。その後は祖父母と共に暮らす。
Gさん	24歳	父, 母, 兄2人⇒父, 兄2人	小6の頃に母と死別。
Hさん	21歳	父, 母, 弟	19歳の頃に父が脳梗塞になり失業。現在も右半身に麻痺が残る。
Iさん	22歳	父, 母, 姉⇒母, 姉	19歳の頃に父と離別。
Jさん	21歳	母, 祖父, 祖母, 異父弟	保育園生の頃に父と離別。母のDV・ネグレクトにより小6から現在まで祖父母宅で暮らす。異父弟は母と同居。
Kさん	22歳	父, 母⇒母	高2で父と離別。
Lさん	24歳	母	2歳の頃に父と離別。

## 第2章 「普通じゃない子」として生きる

### 2-1 わたしは「普通」じゃない

従来の貧困研究の関心は、どのようにして彼らの家庭が貧困状態に陥ったのかという背景のみであり、その文脈における子どもは、親に振り回される無力な存在として描かれてきた。しかし、自己や自身の家庭をどのように認識、解釈し捉えるか、そしてどのようにそれを表出するかという部分に関しては、あくまでも子どもの主体的な行為である。ここでは、当事者の語りを中心に貧困家庭の子どもたちがどのようにして“貧困意識”を抱くのかについて考えていく。

インタビューを進めるなかで、頻繁に耳にした言葉のひとつに「普通」がある。当事者は語りのなかで、ふたつの“普通”を無意識に使い分けている。

「小・中(学生)の頃は特に…(自分の家庭のことを)あんまり話したくなかった。普通じゃないやん。」

〔筆者：普通じゃないというのはどういう面で?〕

「経済的にかな。だってみんないっぱい物買ってもらうやん。」

(Cさん・25歳／2020年10月9日)

「普通がほしかったです。親が二人いて、誕生日・クリスマスのお祝いをしてって。家に親がいないとか、学校行事に(母親が自分の)彼氏を連れてくるとか。つらかったですね。」

(Eさん・25歳／2020年10月16日)

「苦労した方がええって言うけど、芯は強くなるって言うけど…みんな楽しそうやん。普

通の金あって、親おってっていう家庭を羨ましく思う。“なんで自分なん？”って気持ちは常にあるな。後々良かったと思うんかもしれへんけど、親に(お金を)出してもらって、苦労しない子の方が幸せなんちゃうん？ こっちから見てて普通の方が幸せそうやし。」

(Fさん・22歳／2020年10月21日)

このような語りのなかで用いられる「普通の家庭の子」とは「社会で一般的とされている家庭環境の子」であり、言い換えると「両親が揃っていて、衣食住や学習、文化的活動が不自由なく与えられる家庭の子」となる。

「(児童養護施設入ってからの暮らしは)普通やな。とにかく普通。ただただ暮らしていくだけって感じ。」

(Aさん・22歳／2020年10月5日)

一方で、Aさんのような「この暮らしが私の普通だ」というような語りのなかで用いられる普通は「この暮らしは私にとってのあたりまえである」ということを意味する。直接的に普通という言葉が用いられずとも、自身の家庭環境について淡々と語る当事者の姿からは、自身の境遇を“異常事態”としてではなく、“日常”として捉えている様子がうかがえる。

二つの「普通」の使い分けから、当事者は「この暮らしは私の普通だ」と語る一方で、社会一般や他者が思う「普通の家庭像」を認識しており、「普通ではない私」という自意識を抱えていることがわかる。彼らは主に、経済的な面や家族構成の面から自分の家庭は「普通ではない」と述べている。その語り口は、社会一般にある共通認識としての「普通の家庭像」というものさしで自らの家庭を鑑みた結果であり、自分の家庭を客観的に捉え直したものである。

ジェイ・マクラウドはアメリカにおける低所得者層の白人・黒人少年グループの民族誌的調査を行った。マクラウドは、低所得者層として主流派とは異なる独自の共通価値を有し特徴的な下位文化を構成すると考えられてきた少年たちが、主流派の文化や価値観を受け入れ十分に内面化していることを明らかにした(マクラウド2007)。マクラウドが調査対象とした少年グループと同様に、ここで当事者が用いる「普通」はあくまで主流派とされる他者のまなざしを考慮したうえでの「普通」であり、当事者が日々の暮らしを送るなかで「自分の家庭が異常だ」と捉えていることを意味しない。

また、当事者の語りに度々登場した「みんな」・「あっち」／「うちら」・「こっち」というような表現にも着目する。

「うちらがお金持ち(の暮らし)を想像することは簡単だけど、あっちには(貧しい暮らしを想像することは)無理だろうな～。学校とかでは(Dさんの暮らしぶりは)普通に見えるんだらうけど。」

(Dさん・22歳／2020年10月9日)

「仲良い子とかが、“困ったことあったら言ってね”とかいうけど、何ができるん？ 何してくれるん？ 何がわかんねん的な。こっちの気持ちなんか理解できひんやろって思う。」

(Fさん・22歳／2019年9月18日)

「みんな」・「あっち」／「うちら」・「こっち」という表現は、自らと“自分とは異なる大多数の他者”を明確に区別し、境界線を引くものであると捉えられる。

厳しい経済状況にあたり、家族構成が一般的でなかったりする「普通ではない」「こっち」・「うちら」と経済的に困っていないように見え、両親が揃った「普通」な「あっち」・「みんな」。主流な家庭環境に対して、“少数派である自身の家庭環境”を当事者は理解し、内面化している。

## 2-2 わたしは「普通」じゃない“らしい”

当事者が前に述べたように、「自分の家は普通じゃない」「自分の家庭は貧乏だ」と認識するのはなぜだろうか。ここではどのような過程を経て“少数派”としての自己を認識しているのかについて考えていく。

「小学生のとき、友達と駄菓子屋行くときに、お小遣い(がもらえないこと)でつらかった。当たり前のようにもらえてと思ってたからさ。それで、あー貧乏なんやって。」

(Aさん・22歳／2020年10月5日)

「学校で“お年玉なんぼもらった？”みたいな話になったときに、あー自分って少ないんやって。親からは1000円とかやったし。あとは、“授業料払っての紙”もらった時とかに(自分は周囲と)ちがうなって。」

(Cさん・25歳／2020年10月9日)

「(自分の家庭が貧しいということに気が付いたのは)低所得者向けの県営住宅に住んでるってことかな。持ってない組なんやっていうのはあった。オートロックなんかないし、なんか汚いし。なんとなく自分の地域だけが違うって思った。」

(Fさん・22歳／2020年10月21日)

Aさん、Cさん、Fさんの語りにみられるように、家庭のなかで日々を送るだけでは意識しなかったことが、学校という異質な他者と出会う場に入り、他者との差異を感じることによって見えてくる。奥田若菜は、首都建設のために移住してきた元建築労働者の街であるブラジルの衛星都市セイランジャで暮らす貧困層(ポブレ)と、首都ブラジリアの市街中心部であるプラノピロットで暮らす富裕層(ヒコ)について「衛星都市に足を運ぶことのないヒコにはポブレは見えない。(中略)一方で、学業や仕事のために中心に足を運ぶ機会のあるポブレからはヒコは可視的である。ポブレはヒコの生活を目の当たりにすることで、自分が「ポブレである」ことを日々、意識させられることになる」と述べている(奥田2017:67)。奥田の例と同様に、貧困家庭の子どもたちは学校に通うことで自分とは違う、または自分より裕福な他者の暮らしを会話や行動から感じ取る。家と学校を往復するうちに、自分が「人とはちがう」、「貧乏だ」ということを日々意識させられる。このような過程を繰り返し経てはじめて、“少数派”としての自己を認識するようになるのだ。

また、Iさんは世帯年収1,000万円程度の高所得な家庭に生まれ育ったが、19歳の時に両親が離婚したのを期に暮らしぶりが増えた。Iさんは現在の暮らしぶりを貧しいと感じる



理由として「家の狭さとか、賃貸になったとかかな。部屋が前住んでいたところの三分の一くらいになって…」(Iさん・22歳／2019年9月25日)と語っている。Iさんのように、他者との比較ではなく、過去の自分自身の暮らしぶり比べて今の暮らし向きが貧しいと捉えるケースもある。このように「貧しさ」を認識するには比較対象となる他者や過去の経験が必須であり、単に家庭内で生活しているだけでは「貧しさ」を感じることはできないのだ。

さらに、当事者が自身のことを「普通ではない」、「貧しい」を捉えるようになったエピソードとして以下のような語りがみられた。

「お母さんにさ、小4くらいから“父のせいで貧乏だ”みたいな父の悪口とか酷さを子守歌のように聞かされてたから…。それでもう、お父さんのこと憎まなきゃいけないみたいな気持ちはあったかな。」

(Dさん・22歳／2020年10月9日)

「ばあちゃんが“金ない”が口癖で、あ一金ないんやなって思いました。けど、実際はあるんじゃない？とも思ってましたけどね。多分貯金切り崩して生活費に充ててたんやと思うんですけど、あまり不自由は感じてこなかったから。」

(Jさん・21歳／2019年9月4日)

「(母が亡くなったときに)おばあちゃんに“母親がいないのはかわいそうだ”と言われてたから、(自分のことを)かわいそうだと思ってた。」

(Gさん・24歳／2020年11月3日)

Dさん、Jさん、Gさんの3人は、幼少の頃に親や祖父母といったごく近い親族からかけられた言葉をそのまま受け入れ、自己を「貧しい」、「かわいそうな存在だ」と捉えていたという。Dさんはその後、学校生活を送るなかで同級生との差異からも貧しさを感じるようになったという。その経験は、母親の発言を裏付ける形でDさんの貧困意識を補強していったと考えることができる。Gさんは高校生の時に教師からの腫れ物に触るような扱いやまなざしに不快感を覚えたそう。これはGさんのなかで自分の境遇への捉え方が変化し、他者の言葉をそのままに受け入れ自身をかわいそうだと感じていた段階から、憐憫を含む他者のまなざしに抵抗感を抱く段階への転換が起きたと考えられる。一方でJさんは、幼少期から現在に至るまで一貫して、実感としての貧しさや他者との差異は感じたことがないものの、かつて祖母が口にしていた「金がない」という言葉から貧困意識を抱いているという。

親族によるレッテル貼りとも捉えられる言葉は、子どもに受け入れられた後、Dさん・Gさんのように自己認識が強化もしくは弱体化当初の意味合いから変化する場合もあれば、Jさんのように長きにわたって持続する強固な自己認識となる場合があるのだ。

Gさんが教員から感じた腫れ物に触るようなまなざしや接し方については、他にも多くの当事者が言及しており、これが“少数派”としての自意識を形成したと語る人もいた。

「(父親が亡くなった時に)教師のはれものに触るような扱いされて。それで“自分ってそ

んなやばくみえてんねやって。カウンセリング受けた方がいいよとかも言われてさ。自分のなかでは、悲しいっていうより“あーそっか。これからどうしよう”って気持ちの方が大きかったからさあ…。」

（Bさん・22歳／2020年10月6日）

「（父が倒れたということで）教師に変な気の遣われ方とか腫れ物扱いをされているという自覚はありましたね。“かわいそうや”と思われる要素はないと自分では思っているのに、なんで“かわいそうや”と思われてるんやろという違和感。心の貧困ではないと思ってるし…。しんどいけど、信頼…しんどいながら家族で良くしていった。外に出たら世の中にある目に見えない基準で測られている感じがするんです。」

（Hさん・21歳／2020年11月14日）

「（親が離婚して）苗字が変わったときの担任の過剰な気遣いで他には（母子家庭や貧困家庭が）おらんねんなって察した。」

（Kさん・22歳／2019年9月14日）

Bさん、Hさん、Kさんは教員の発言やまなざしから、自分が他者の目にどう映っているかを敏感に察知したという。この3人は同級生や他の生徒への接し方とは違う、もしくは以前の自分に対する接し方とは異なる態度やまなざしを教員から向けられたことで、“少数者”としての自己を客観的に捉えている。Hさんの語りにある“目に見えない基準”とはまさに“普通のものさし”である。「家庭環境が複雑な子には家族の話はタブーであり、配慮が必要」という“普通”側の一方的な「優しさ」に含まれているのは「“普通”でないのはかわいそうだ」という憐憫のまなざしだ。

両親が揃った裕福な家庭で育ったと自己を認識しているLさんは貧困家庭や母子家庭の同級生などに対し「（貧困家庭や母子家庭であると）知ったら気を遣うっていうのが大きいな。気に障ることとか傷つけるようなこと言ってないかな？とか。自分の幸せが傷つけてしまっていないかなって。」（Lさん・22歳／2019年9月17日）と語った。Lさんが抱いているような傷つきやすくかわいそうな存在としての“貧困家庭の子ども像”は、“普通のものさし”に憑りつかれた典型的なステレオタイプである。

Bさん、Hさん、Kさんの3人以外にも多くの当事者がこの教員や同級生をはじめとする他者からのまなざしに不快感や違和感を抱いていると語ってくれた。

「（施設に入り、他の地域に移住した際に）“何で転校してきたん？”って同級生に聞かれて、虐待されてたこととかを全部話してんやんか。けど、“へーそうなんや”って感じで、腫れ物扱いされへんかったっていうのは大きかったなあ。だから、今も自分の経験とかを隠そうとも思わへんし。その時に同情されてたら経験を隠すようになってたかもしれへんなあ。」

（Aさん・22歳／2020年10月5日）

その一方で、この様に他者が自分をどう捉え、接してくるかは当事者がその後“どのよう

に振舞うべきか”を決定する要因の一つになっている。Aさんが自身の境遇を話したことに  
対する同級生の対応は、今回の聞き取り調査においてレアケースであり、ほとんどの当事  
者が、同情的なまなざしを向けられた経験があると語っていた。ここからは、当事者では  
ない人々からの「優しさ」が当事者の“少数派”としての自意識をかえって増幅させている  
ことがわかる。

### 2-3 「普通」じゃないをどうするか

これまで、①同級生や近隣住民など、身近な他者との比較 ②親や他者の発言 ③教員や  
親戚、同級生の「気遣い」という3点から、子どもたちが「普通ではない自分」、「貧しい自分」  
を内面化していくという過程をみてきた。以下では「普通じゃない子」という自意識を獲得  
した後、彼らがどのように自身を表出し、振舞うのかという点について当事者の語りから  
みていきたい。

「虐待受けてたとか、家が貧しいとかをコンプレックスには思っていないかな。今となっ  
ては笑い話にもできるし。(家庭環境などについて)聞かれたら話すし、隠そうとは思わ  
ないかな。」

(Aさん・22歳／2020年10月5日)

「小・中学生の時は、自分のことあんまり話したくなかった。ファッション好きやったか  
ら、勝手にカネモ(お金持ち)やと思われてた。だから家も来られたくなかったし。けど、  
高校生の時にどうでもよくなった。隠すのめんどいし、話すとなんか楽になったから。」

(Cさん・25歳／2020年10月9日)

Aさん・Cさんは自身の境遇を隠すことなく、誰にでも話せると語っていた。Aさんは  
前節で取り上げたように、小学校時代に自分の経験を語った際に同情的なまなざしを向け  
られることがなかったことから、自身の境遇への劣等感や、自身の境遇を隠そうという気  
持ちはないという。Cさんは小・中学生の頃は同級生からカネモ(お金持ち)だと勘違いさ  
れていたという経験を持ち、その際に自分の家庭環境を隠したり、家を見られたくないと  
いう気持ちに囚われたりしていたという。高校生になり、自分を隠すことが面倒でおお  
びらに語るようになり、気持ちが楽になったとも語っているが、Cさんの語りには、友人  
が甘やかしてくれた、助けてくれたなど高校時代の友人とのエピソードが多くあった。

これは、高校生になり気が置けない友人ができたことで、自然と“自分を出せる”環境が  
整ったとも捉えることができる。自分の家庭環境を話すか隠すかという場面において、「誰  
になら話しても良いか」という点が当事者の意思決定に重要な要素となっている。

「似た家庭環境・境遇だと感じた人や人の話に普段からしっかりと耳を傾けてくれる人  
には気兼ねなく話せます。お金とか地位属性が全てだと思っていそうな人や自分は自分の  
努力だけでここまでやってきたんだと豪語するような人には話したくないです。偏見も  
ありますが、同年代だと奨学金を借りずに大学に来れているような人に話すのは少し抵  
抗があります。」

（Hさん・21歳／2020年12月10日）

Hさんは積極的に自分から家庭環境の話をしなないものの、他者から聞かれた際は正直に自身の境遇を語るという。しかし「誰になら話しても良いか」という点を重視しているといい、おなじような家庭環境にある人には気兼ねなく話ができる一方で、貧困家庭や一般的ではないとされている家族構成の人に対して偏見や同情のまなざしをむけてくる人に話すことには抵抗感があるという。Hさんの言葉でいう「お金とか地位属性がすべてだと思っていそうな人」は“普通のものさし”で値踏みをするような人であり、「自分は自分の努力だけでここまでやってきたんだと豪語する人」は、自身の境遇が恵まれているという自覚のない人、自分とは違うバックグラウンドを持つ人が“見えない”人であると言い換えることができるのではないだろうか。また、Hさんは「誰になら話しても良いか」を見極める際に、会話の間や表情、態度やしぐさ、言語化できない雰囲気を見ると語ってくれた。ここからは、当事者が自身への偏見や同情的なまなざしを回避するために、様々な判断材料から慎重に聞き手を吟味していることがうかがえる。

また、自身への偏見や同情的なまなざし、気まずい雰囲気を回避するための実践として自分の境遇を隠すと語ってくれた人もいた。

「自分のこと話すのホンマ面倒くさくて。気遣われるのも面倒くさい。だから他人にしられるのが嫌やねんな。大学で父の日の話が出て…“何あげた？”って聞かれたときは、“花あげたかなー”って嘘ついたし。大学では父親おるていで話進めてるー。」

（Bさん・22歳／2020年10月6日）

「めっちゃくちゃ仲良い子とか、既に(自分の家庭環境を)知ってる子には言うけど、基本自分のことは隠してきた。みんな普通に父母おると思って話してくるし、こっちもおるていで流してる。」

（Fさん・22歳／2020年10月21日）

「家庭内に色々あったって会話からなんとなくわかる人には言うかなあ。表面的にしかも語らへん人とかっておるやんかあ？ 高校の時仲良かった子もお父さんとお母さんに不和があって…。実は裏プロフィールみたいのがあって。今住んでるところに引っ越しした理由とかもやし、お父さんもおることにしてるし。“お父さん・お母さんに渡してね”って物ももらった時もスルーして“ありがとうございます！”だけ言っておいたり。」

（Iさん・22歳／2019年9月25日）

Bさん・Fさん・Iさんは、自身の境遇を一部の友人を除いて完全に隠しているという。また、この語りで着目すべき点は、3人が嘘をついたり話をスルーするというように、意識的な言動をとっていることである。一般に、嘘というネガティブなイメージを抱きがちであるが、3人が嘘をつくという行動をとっているのはあくまで“普通のものさし”や同情的なまなざしを回避する一種の「護身術」ともいえる。また、3人がつく嘘には主に家族構成の面で“普通のものさし”に即した一般的とされる家庭像が色濃く反映されている。ここには

「普通」ではない部分を相手に見せた際に起こる面倒ごとを避けるには、「普通」を演じることが最適だという当事者の戦略性を垣間見ることができる。

「バイトとか受験の面接のときは自分から話すなあ。大学は保育系やったし、バイトも児童養護施設やったから自分の経験とか話したら有利かなあって。“自分の人生について書く”みたいな課題の時も毎回スラスラかけたな。話すことにも困らんし、自分の経験してきたこと話すだけでOKやからさあ。」

(Aさん・22歳／2020年10月5日)

「友達に“旅行行こ”とか言われたときに、“お金ないから！”で済ましてた。遊びの約束とかを断る手段として貧乏をつかってたかな。」

(Dさん・22歳／2020年10月9日)

「保護者の人たちが、部活終わりに車で送ってくれたり昼ご飯食べさせてくれたりした。保護者の人たちは(自分の家庭環境を)知ってるけど、特に触れることもなかった。だから自分もある種それを利用して恩恵を受けさせてもらった部分もあるね。」

(Gさん・24歳／2020年11月3日)

Aさん・Dさん・Gさんの語りには、貧しさや家族構成といった自身の境遇を利用してきたともとれるものがあった。Aさんは受験やアルバイトの面接といった場面において、自分の生き立ちを語ることで、その分野についての経験知が豊富であることや保育現場や児童養護施設にやってくる子どもの気持ちがわかることをアピールポイントとして活かしてきたという。世間からは「かわいそうな経験」をしてきたと捉えられがちであるが、Aさんは貧しさや虐待の経験を他の人は望んだところで経験できない稀有なものとして捉え、彼女自身の強みにしている。

Dさんは「お金がない」ことを、友人からの面倒な誘いを断る切り札として使用していたという。他の家庭の厳しい経済状況を深堀りするわけにはいかないという「普通」の人たちの「気遣い」を逆手に取り、誘いをうまくかわす常套句に使うというDさんの実践は、「普通」の人たちから不自然な「気遣い」を何度も受けてきたからこそできる術であろう。

Gさんは、チームメイトの保護者が自身の家庭環境を周りまわって知っているということに気づいていた。しかし保護者たちは家庭環境についてあえて深堀りしてきたり、見当違いに気を遣ってきたりするわけではなく、それとなくGさんを車に乗せてくれたり、お弁当をわけてくれたりしていたそうだ。単に同情的なまなざしを向けてくるわけではなく、あくまでさりげない行動として自分を思いやってくれた保護者たちの存在を「ありがたかった」とGさんは語っている。そしてGさんはその経験を「ある種利用して」いたと捉えている。

こうした語りからは、周囲からどこか「かわいそうな存在」として認識されていることを理解しつつも、自分にとって有益な存在である以上は拒絶しないというしたたかさを含んだ、生きていくための当事者の実践が垣間見える。

## 2-4 「普通」じゃないから見えたこと

ここまでは主に当事者が子ども時代に感じたことを振り返り、語ってくれたことを取り上げてきた。ここでは環境の変化が起きたり、自身を客観視できるようになったりしたことで、当事者が自身の貧しさや家庭環境をどのように捉えなおすようになったのか、そのプロセスに注目してみたい。

「戸籍上の父親とか、血縁関係の父親とか、父親みたいな人(母の恋人)とか色々おったけど、自分の人生のなかにお父さんはいないって思ってる。お父さん像みたいなものもない。だから、(夫が父親として子どもと接するのを見ると)不思議な感じやし、“パパってこんな感じなんや”って思ってる。夫には、もし普通にお父さんがおったらこうしてほしかったというのも伝えている。」

(Aさん・22歳／2020年10月5日)

「今までは(家族から)女として、モノとして見られてた感じがします。今は自分のことを人間として見てくれているという感じですね。(結婚、出産を通して)こんなに信頼できるところがあるんや！って思えるようになったのは大きな変化ですかね。貧しさはお金じゃなくて、一緒に暮らしている者同士、この人には頼れるとかそういう部分にあると思います。」

(Eさん・25歳／2020年10月16日)

Aさん・Eさんの事例は、現在、結婚・出産を経験し、新たな家族と共に暮らすなかで、“家族”の捉え直しをしているものである。Aさんは両親の離婚、再婚、母の恋人と暮らすというこれまでの経験を通して「自分の人生にお父さんはいない」、父親像がないと感じていたようだが、夫がわが子に対し父親として振舞う様子を見て、父親像を獲得しつつあるようだ。また、自身の経験から父親にして欲しかったことを夫に伝え、子育てに活かしているという。

Eさんは、母親と母の恋人の関係性においての自分は「部外者だった」とも語っていた。新しい父からもDVを受けていたことから家庭への信頼というものが希薄であったが、夫や子どもと生活を営むなかで信頼できる場としての家庭を知ったのだという。また、Eさんは一時期シングルマザーであったことから、自身もシングルマザーの社会活動に参加するようになり、「自分の話に需要があると感じるようになった」とも語っている。

こうした事例は、貧困家庭の子どもは大人になってからも永遠に「貧困家庭の子ども」であり続けるとは限らないことを示している。ここからは、新たな家族を持つという経験が子ども時代の家庭像を塗り替える契機になること、そしてその認識は絶え間ない変化の渦中にあることがわかる。

次に紹介する事例は、似たような環境で育った友人との関係のなかで自身の経験を肯定的に受け入れるようになったものである。

「自分の生まれた環境で良かったって最近思う。色んな人に助けってもらってという環境があったから結果的には良かったんかな。親レベルやと(親との関係性だけを見ると)ビ

ミヨーやけど、友達にいっぱい甘やかしてもらった。」

(Cさん・25歳／2020年10月9日)

「なんだかんだ楽しかったなって思う。しんどかったのはしんどかったですけど。母親は自分に“愛してくれる人なんかおらん、失敗するぞ”って否定的なことを言ってきましたけど、境遇が近い友達とか仲間ができて、自分を愛してくれる人ができました。」

(Jさん・21歳／2019年9月4日)

2人は貧困家庭出身であったことから、近い境遇をもつ友人や仲間との紐帯を強めることができたと言っている。子どもにとって家庭は大きな存在ではあるが、すべてではない。貧困家庭の子どもが「不幸だ」とするような言説は、貧困家庭であることから子どもたちが得た家庭外での関係性を一切無視している。家族との不和やわだかまりがあったからこそ得られた新たな社会関係もある。そして、友人や仲間との新たな繋がり、自身の家庭環境を「嫌なだけの思い出」と捉える一面的な見方から解放してくれるものであったことがわかる。

「人の痛みがわかるようになった。悪い方に想像力が働いて、気が遣えるようになったかな。苦労したくてもできない人はいる。こっちが成功することはできるけど裕福な人が貧乏になるのは無理じゃん。」

(Dさん・22歳／2020年10月9日)

「これまでの20年が良かったとは思えない。悲しいこともつらいこともあった。けど、考える力もついたし、似た境遇の人を理解できるようにもなったかな。普通ではないからこそ感じられること考えられることもあると思うねん。」

(Fさん・22歳／2019年9月18日)

「(“普通”ではない家庭に育つと)ちょっと早く大人になれる気がする。大人のしんどさも肌身で感じるし。経済的な面でも考え方が早く大人になるんじゃないかな。考えることが多いから、若干違う見方ができる感じ。」

(Lさん・24歳／2019年9月13日)

Dさん・Fさん・Lさんの3人は、「普通」ではない家庭に生まれ育ったからこそできる考え方や他者理解の術が身についたことを肯定的に語っていた。貧しいことや家庭環境が一般的ではないことそのものつらさや悲しさを払拭したり、肯定的に捉えたりすることは難しくとも、「普通」ではないことで得られたものについては「良かったこと」として当事者は捉えている。子どもの頃はネガティブな感情に支配されていた人も、自分を客観視できるようになり自身の境遇を多面的に捉えることが可能となってくる。

「早く大人になる」というLさんの語りは、同年代が一般的に経験してきていると予想できる以上の経験をしてきたということへの自負が含まれているのではないだろうか。人並み以上の経験とは、人生を歩むなかでの困難や苦悩であり、それをどう乗り越えるのか、

対処するのかという主体性を伴う思考・行動の連続のことである。Dさんは、苦労は望んでできるものではないという点に言及しているが、その点で貧困家庭出身者は優位性を持っているといえるだろう。

### 第3章 “普通のものさし”の正体

#### 3-1 “普通のものさし”と対峙する

従来の「子どもの貧困」研究は、外的な要素で測定可能な貧困線や剥奪指標などによって「貧困」を定義し、「貧困家庭の子どもたちは貧困意識を抱いているだろう」という前提に立って論を進めてきた。しかし、ここまで見てきたように、当事者の語りからは「貧困家庭“だから”自分は貧しい」という貧困意識を抱くのではないということが明らかになった。調査結果からは、貧困家庭の子どもたちは、親や近い人物からかけられた言葉や、他者の自分への接し方、他者と自分との差異から貧困意識や少数派としての自意識を獲得していく過程が浮かびあがってきた。

今回聞き取り調査に協力してくれた人のなかには、相対的貧困の定義を採用すれば「貧困」にあてはまらない人が多くいた。ここからは、定義の範疇を超えた「貧困」や、人びとの「貧困意識」を煽る社会構造や社会的風潮が存在している可能性を見出すことができ、「貧困」の定義そのものの検討が求められるのではないだろうか。さらに、子どもたちがどのように自己を規定していくかという点に目を向けることで、教育現場や貧困家庭の支援活動における経済的困窮児童との接し方や支援者と被支援者間の軋轢、諸問題に対する新たな視点がもたらされると考える。

さらに、貧困家庭であるからこそ気づけたこと、知れたことや貧困家庭で「良かったこと」についても聞き取ることができ、そこからは、「普通」ではないことの優位性がみられた。これは従来の貧困研究やドキュメンタリー、ルポルタージュなどでは扱われてこなかったことである。しかし、これらのポジティブな思いや意識は、当事者が自身の置かれた境遇を受け入れ自己形成をしていく過程で不可欠なものである。貧困家庭のネガティブな側面ばかりを強調することは、「こんなにかわいそうだ」「こんなに慎ましやかな人たちなんだ」という一面的な貧困イメージを形成し、世間の“施し意識”を煽るだけである。そのように形成された一面的な貧困イメージは、イメージとは合致しない貧困家庭への糾弾や自己責任論の強調につながりかねないということに留意する必要がある。

また、従来の研究では貧困対策の基準となる貧困線や家庭環境などの「不利な土台」にばかり焦点があてられた結果、親に振り回されるだけの無力な存在として貧困家庭の子どもが描かれていた。しかし本論文では、当事者は「普通じゃない子」という自意識を獲得した後、様々な自己表出の実践を取るということが明らかになった。今回の聞き取り調査では主に、自身の境遇を、①誰にでも話す、②人を選んで話す、③隠す・嘘をつく、④利用する、という4つの実践が見られた。これらの実践から浮かびあがるのは、親に振り回されるだけの無力で「かわいそうな存在」ではなく、他者からのまなざしや「普通」の人たちがどのような思考パターンをとるかを経験から熟知し、貧しさを時にはしたたかに利用して印象を操作したり、利益を享受したりする主体的な存在としての姿であった。これは“普通のものさし”を回避し、操り、利用するということと同義である。



### 3-2 “普通のものさし”を乗り越える

第1章1節で述べたように、いま私たちが生きているのは不安定、不確実な社会であり、誰もが不安定性に翻弄されている。そして、社会成員の大多数は自覚の有無を問わずとも、「自己責任論」の矛先が自らの方を向くことに怯え、漠然とした不安感を常に抱えている。第2章2節で紹介したHさんの言葉でいうところの「お金とか地位属性がすべてだと思っていそうな人」や「自分は自分の努力だけでここまでやってきたんだと豪語する人」はまさにこの不安定性に翻弄されている人々である。“普通のものさし”にどっぷりと浸り、金・モノ・“記号”としての数字・地位属性(肩書き)に固執している人は、それらを得ることで一時的に充足感や安心感が満たされるかもしれないが、肥大した欲求がもたらすさらなる不安に苛まれることになる。また、「自分は自分の努力だけでここまでやってきた」と豪語する人は、自らが“つまずいた”際に、他者から科される、そして自らによって自らに科される二重の「自己責任」の重みを知らないのだ。

本論文では、“普通のものさし”という概念を多く用いてきた。これは文字通り、人びとが貧困家庭の子どもたちを異質な存在であると捉える際に引き合いに出す、「普通」(一般的)であるか否かの尺度のことを指している。しかし、それと同時に、“普通のものさし”とは現代社会の不確実さや不安定性に翻弄される人々が内包し、信じて疑わないものの見方や価値観・評価基準、社会通念全般のことであると言い換えることができる。つまり、“普通のものさし”とは、固定化された特定の基準のみを指すのではなく、それぞれの国や地域や時代に存在する流動的なものの見方のことである。このように考えるならば、現代の日本社会における“普通のものさし”とは、「自己責任論」が蔓延する社会におけるものの見方ということも可能であろう。つまり、本論文における“普通のものさし”とは、「普通」(一般的)であるか否かの尺度であると同時に、その尺度を生み出す「自己責任論」そのものなのである。

“普通のものさし”つまり「自己責任論」に囚われた人々が会社の倒産、一家離散、災害、大けがに見舞われたらどうなるだろうか。金もない、物もない、それらに頼るあてもない状況で、たくましく生きていくことなどできるのだろうか。一方で、「自己責任論」の最大の“被害者”ともいえる貧困家庭の、「無力で脆弱な」子どもたちは、不安定性に満ちた世界で“普通のものさし”から逃れる方法—“生き延びる道”を知っている。大多数の人間が“普通のものさし”から逃れることもできず、そしてまた、逃れようとしないうなかで彼らは、“普通のものさし”を弄ぶことが可能なのだ。貧困家庭の子どもたちが、“生き延びる手段”を身につけているのは「不利」と評される生活環境のなかで、その場その場で感じ、判断し、行動に移した結果である。そして、彼らが生きてきたのは、誰もが「落ちる」ことを恐れている「まだ見ぬ底」なのだ。

これは「不利」な土台にばかり注目したり、“普通のものさし”に囚われたりしていると見落としてしまう、当事者の主体的実践であるといえるだろう。不安定で不確かな現代社会においては、誰もが脆弱な存在である。貧困家庭の子どもたちの実践や主体的な生き方は脆弱な存在である我々が、“生き延びる道”を探る上で重要なヒントをもたらしてくれるのではないだろうか。松嶋健は、現代社会では、支配的なあるひとつの理論だけがあらゆる領域において全面化していると述べたうえで、グローバル化の時代は未来の不確実性が格段に高まった時代であると指摘し、ただ一つの理論に基づいた価値判断を拠り所として不

確実性に翻弄されるだけでなく、不確実性に満ちた世界のなかで“生き延びる道”を探る必要性があるとしている（松嶋 2019）。「無力な弱者」、「かわいそうな存在」としてではなく、主体的で生き生きとした存在としての貧困家庭の子どもたちを描き出すことは、一面的な貧困イメージからの克服を可能にするだけでなく、現代人の“生き方”を捉え直すことにつながると考える。

## おわりに

「子どもの貧困のことをやるなら、世界に目を向けないと！日本だけ見てるなんて甘い！」。これは、アルバイト先であるスナックで70代の複数の客から実際に言われた言葉である。彼らは続けて「俺は毎月1万円ずつユニセフに寄付してるんや！」といかにも誇らしげに語った。この言葉を聞いて私は、猛烈な怒りに震えた。彼らの目に映る「貧困」は、ユニセフのテレビCMで描かれる「地球の真裏にいる、自分とは違うかわいそうな子どもたち」の姿だけなのか、と。「貧乏な暮らしをしている隣人のことを無視してまで、地球の裏側にいる見たことも話したこともない子どもたちのことを調査したいとは思いません。」とスナックの「おんなのこ」失格な言葉を強く吐くと、彼らは分が悪そうに俯いた。

「貧困問題」を卒論の大きなテーマにしようと決めた2年前、私は凄まじい怒りと「正義感」に燃えていた。「どうして親の金で大学に来ている子がいるのに、私は借金を抱えなければいけないのか」、「なぜ、こんなにも自分ばかりが困難を強いられなければならないのか」といった境遇への不平不満が募っており、一部の人間ばかりが損をする社会に対し違和感を覚えたのだ。しかし、その頃の私が行っていたことは「自分と同じような貧しい子どもたちを救う」という大義名分を振りかざしながら、いかに自分はかわいそうであるのか、つらい目にあってきたのかをアピールすることに過ぎなかった。もしかつての私が、例の客たちの言葉を聞いていたら「毎月寄付をされてご立派ですね！世界中にはお金がないことで困っている子どもたちが沢山いますからね。」というような言葉を心から返していただろう。いま思うと、誰よりも自分自身が“普通のものさし”に囚われていた。

調査を進め、自分とおなじような境遇の人たちにインタビューを行ったり、日々会話をしたりするなかで、彼らの「脆弱な土台」よりも“人間としての強さ”を意識するようになった。時に自分が置かれた状況を嘆き怒りや悲しみに囚われながらも、彼らはなんとか生きている。「強固な土台」があるにも関わらず先行き不安や悩みに支配され、太刀打ちできずたじろいである人はいくらでもいる。そのような人たちに対して、「なんだかんだ言ったってどうにかなるし、どうにかしないといけないだよ。」と言いたくなってしまう。私がこのように考えることができるのは、まさに「なんとか生きてきた」からであり「底辺」で生きるなかで身に着けた「強さ」だと自負している。

紹介してきたように貧困家庭の子どもたちは、無力なだけの弱者でもなければ、かわいそうなだけの存在でもない。彼らは自身の置かれた状況で、自分なりの創意工夫や主体的な実践を通し逞しく毎日を生きている。卒業論文を書くなかで、彼らの特異な点は「どこに生まれたか」ではなく、「どのように生きてきたか」という点にこそあるのだと気づくことができた。執筆を通して、自分や友人たちが置かれた状況への捉え直しがなされたということは、私自身の大きな変化でもある。

ここまで貧困家庭の子どもたちの「強さ」を記述してきたが、本論文は決して貧困を正当化し、礼賛することを目的としていない。経済的困窮や物質的な欠如、家族構成に関する周囲からの偏見などによって、困難に直面したりつらい思いをしたりしたという経験は聞き取り調査内でも多く語られた。貧しい子ども、「普通」ではない子どもとして生きるということが楽しいばかりの道ではないことは言うまでもない。しかしながら、つらく悲しいばかりの道でもないということにも目を向ける必要があるのだ。貧しさと共に生きるなかで、貧困家庭の子どもたちが主体的に実践してきた取り組みの数々を“見えないもの”、“なきもの”とするのは彼らの「生き方」や人生そのものを否定することである。他者に弱者の烙印を押すことは、他者を自身と対等な人間としてみなさないことと同義である。これからの貧困研究やメディアでの取り扱われ方において貧困家庭の子どもたちが彼らとおなじ、一人間として取り扱われることを切に願っている。

今回の研究では掬いきれなかった貧困家庭の子どもたちの生き活きとした暮らしぶりや実践の数々を明らかにできるように当事者の一人として今後も調査を重ねていきたい。

### 【引用文献】

- 阿部彩(2008)『子どもの貧困：日本の不公平を考える』岩波書店
- 池谷和子・足立文美恵・今出和利(2020)「子どもの貧困の定義を探る：法政策の検討に向けて」東洋大学現代社会総合研究所『現代社会研究』17号: pp.1-13
- 奥田若菜(2017)『貧困と連帯の人類学：ブラジルの路上市場における一方的贈与』春風社
- ギデンズ, A. (2009)『社会学(第5版)』松尾精文ほか訳、而立書房
- 厚生労働省(2019)『2019年 国民生活基礎調査の概況』(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/index.html>: 最終閲覧日2021年1月23日)
- 知念渉(2018)『〈ヤンチャな子らの〉エスノグラフィー』青弓社
- 西澤晃彦(2010)『貧者の領域：誰が排除されているのか』河出書房新社
- 林明子(2016)『生活保護世帯の子どもたちのライフストーリー：貧困の世代的再生産』勁草社
- 松嶋健(2019)「ケアと共同性：個人主義を超えて」松村圭一郎, 中川理, 石井美保編『文化人類学の思考法』世界思想社、pp.165-177
- バトラー, J. (2018)『アセンブリ：行為遂行性・複数性・政治』佐藤嘉幸・清水知子訳, 青土社
- マクラウド, J. (2007)『ぼくにだってできるさ：アメリカ低収入地区の社会不平等の再生産』南保輔訳, 北大路書房
- 松本伊智朗(2019)「なぜ、どのように、子どもの貧困を問題にするのか」松本伊智朗, 湯沢直美編『生まれ、育つ基盤：子どもの貧困と家族・社会』明石書店、pp.19-62